ポリス成立期のエレウシスとアッティカ

高橋裕子

一　はじめに

アッティカ北西部、トリアシア平野の南西に位置するエレウシスには、サラミス島を間近に見晴らすアクロポリスの南東斜面に、デメテルを主神とする聖域があり、特にペイシストラトスの時代以降発展した。[1] その聖域で催された祭儀は、加入者個人に幸福を与える秘儀として、また、豊作を祈る農耕祭儀として、古典期アテネの社会において重要な役割を果たした。

このエレウシスの祭儀が、古典期において、ゲノスが管理する地方祭儀からポリスが管理する祭儀へと変化、発展していく過程は、桜井万里子氏が具体的に解明された。[2] 氏は、碑文史料を分析した結果、前四六〇年頃までに、エレウシスの祭儀は、財政的側面においてポリスが掌握したこと、しかしまた、ポリスの祭儀に対する介入が強化されるに当り、エレウシス側が抵抗を示したこと、そしてその抵抗は、ポリスが譲歩してエレウシス側に一定の権利を認めなければならないほど強いものであったことを、明らかにされた。

このエレウシスの集落とアッティカとの、ポリス成立期における関係を探ることが、本稿の課題である。[3] 桜井氏が明らかにされたように、古典期においてさえ、祭儀の運営や管理に関して、エレウシス側がポリスに抵抗を示し、両者の間に確執があった点を踏まえれば、それに先立つ前古典期さらに暗黒時代においては、エレウシスの集落が祭儀に対してより強い権利を有していたとしてもおかしくない。また、エレウシスの集落が政治的に独立していたとさえ推

測する研究者もいる。さらに、パウサニアスによればエレウシスとアテネとの間に戦争があり、「「エレウシス住民は独自に秘儀入信式（テレテー）を執り行なうこととするも、他の点についてはアテネの服属民（カテコオイ）とする」という条件で戦争を終結させた」（I 38, 3）[4]という伝承もある。

とはいえ、暗黒時代と前古典期のエレウシスとアッティカとの関係については、その具体像が十分に明らかにされているとは言えず、また一致した見解が得られているわけでもない。

例えば、我が国においては、桜井氏が上とは別の論考で、この問題に焦点を当てられた[5]。氏は埋葬様式の検討から、前九世紀までには、エレウシスとアテネは文化的一体性を有していると推測され、それをエレウシスがアテネに政治的に併合されていた根拠と見なしておられる[6]。他方で、ポリス成立期の聖域に関して、近年注目すべき研究を公にしたF・ドゥ・ポリニャックは、主にアルゴスのヘライオンの検討から、ポリス成立期においては、その領域を明確にするために、国境の近くに聖域が建立されたという理論を提出した。にもかかわらず、彼は、ポリス・アテネはその理論に当てはまらない例外とみなしており、エレウシスの聖域は前古典期においても、アテネに編入されてはいなかったと考えている[7]。

このように、暗黒時代と前古典期のエレウシスの集落とアッティカとの関係については、諸説が並立しているというのが現状である。

本稿においては、まず、暗黒時代のエレウシスをめぐる問題点を整理した後、最近の考古学的研究成果から、暗黒時代末期から前古典期初期、つまりポリス成立期のエレウシスとアッティカとの関係を検討していきたい。

二　暗黒時代のエレウシスをめぐる諸問題

暗黒時代のエレウシスに関する問題点は、具体的には、次の二点に要約してみることができる。

すなわち、その第一は、暗黒時代と前古典期初期におけるエレウシスの集落が、アテネ中心地域に政治的に統合されていたのかどうか、という問題であり、第二に、暗黒時代以降、エレウシスの聖域を管理していたのは、ポリス・アテネかそれともエレウシスの集落かという問題である。これらの問題は、アッティカが政治的に統合されたのはいつ頃か、という、より大きなテーマの一角を成す。

第一のエレウシスのアテネ中心地域への併合の問題については、他の集落の場合と異なり、「ホメロス風デメテル

讃歌」（以下、「讃歌」）という文献史料が残されており、従来、この資料をめぐって盛んに議論が展開されてきた。つまり、前古典期に成立したと推測される「讃歌」の中に、ポリスとしても中心地域としても、アテネについては一切言及がないことを、エレウシスがアテネから独立していた証拠と見なすか否か、という点が様々に論じられたのである。[8] しかし、残念ながら、文献史学の立場から「讃歌」の解釈に決着をつけることは、他に史料証言を欠く以上、困難であると言わざるをえないのが現状である。

そこで、この第一の問題の解明のためには、考古資料の利用が不可欠である。

エレウシスは、以下のごとく、政治的に独立した集落と見なしうる特徴を備えている。第一に、エレウシスは山系と海岸線によって地形的に独立した平野に、固有のアクロポリスを中心として集落が営まれた。第二に、エレウシスは、アテネ中心地域以外のアッティカにおいて、原幾何学文様期（Protogeometric）から遺物が報告されている、数少ない集落の一つである。[9] つまり、暗黒時代初期の動乱期において、アッティカの他の集落に先駆けて発展した有力集落に属する。これらの点からすれば、エレウシスが政治的に独立していたという可能性も想定しうるだろうが、これは未だ決着のついていない問題である。この問題は以下で詳しく検討するに価する。

ところで、この問題は、上述の第二の問題とも密接に関連している。後期幾何学文様期（Late Geometric －前八世紀後半－）に聖域の南に建てられた「聖なる家」は、[10] エレウシスの祭儀の発達に関する最初期の資料と推測される。また、ミケーネ時代に建てられた「メガロン」には、新たに前八世紀に周壁が造られ、それ以降、前古典期末にテレステリオンが新しく建立されるまで、宗教関係の建物として使用されたと推測されている。これらの資料からは、前八世紀にこの聖域が何らかの発展を遂げたことが示唆される。従来、この聖域発展の初期段階においては、エレウシスの地方集落固有の聖域であったものが、ゲノスの祭儀がポリスに掌握される過程を経て、ポリスが管理する聖域となったと考えられる傾向があった。しかし、暗黒時代末から前古典期初期におけるエレウシスの聖域を、エレウシスの集落固有の地方聖域と見なすか、または、ポリスが管理するポリス・アテネの聖域と見なすか、という問題に関しては、未だ、統一した見解が得られてはいないのである。[11]

さて、暗黒時代のエレウシスには以上の問題が指摘されるが、本稿では、これらを受けて、暗黒時代末から前古典期初期、つまり、ポリス成立期のエレウシスに見られる、墓域や聖域、宗教、信仰の性格を明らかにすることから、

この時代のポリス・アテネまたはアテネ中心地域と地方集落エレウシスとの関係を探ることを目的とする。こうした側面から、暗黒時代のエレウシスはアテネに政治的に統合されていたのか否か、この時代のエレウシスの祭儀は土着的性格を持ったのか否か、という問題に焦点を当て、エレウシスとアテネの関係に起こった政治的、宗教的変化の性格と時期について見通しを得ることは、アッティカにおけるポリス形成の具体相を明らかにする一助となるであろう。

ところで、上述のごとく本稿のテーマに関しては、分析対象となる資料が限られており、従来の研究とは異なる側面からアプローチするためには、新しい考古資料に焦点を当てることは不可欠である。次節では、「アルゴスのモノクローム土器」と呼ばれる土器群に関する最近の研究から、エレウシスに関連する成果を確認しつつ、ポリス成立期におけるエレウシスとアッティカとの関係について考えてみることにするが、研究史上、この土器群がこの問題解明のために資料とされた例はない。したがって、これらの新しい資料の利用はこのテーマに対して、新しい地平を切り開くものと期待される。

三　「アルゴスのモノクローム土器」に見られるエレウシスとアッティカ

(1)

以下、本節においては、「アルゴスのモノクローム土器」と称される土器群に関するN・クールーの研究成果を検討することから、エレウシスとアッティカとの関係を探っていくが、その前に予め、近年の暗黒時代研究の傾向について略述し、クールー論文の学界における位置付けと意義を明らかにしておきたい。

ギリシア暗黒時代に関しては、一九世紀以来土器や埋葬習慣などに関して様々な論考が発表されてきた。現在の暗黒時代研究が、その豊富な研究史上の蓄積に支えられていることは疑いがない。しかし、ここ十数年あまり、伝統的な古典考古学の手法が批判されるにともない[12]、暗黒時代に関しても、統計学的手法を用いた新しい傾向の研究が発表されるようになった。その代表例が、アテネの墓域を分析したI・モリスの研究である[13]。さらに、このような分析方法は、土器資料に対しても適用され、例えば、J・ウィットリーやC・モーガンとT・ウィットローの研究があらわれた[14]。ウィットリーは、土器の文様や副葬品といった考古

資料に関するデータを数値化し、それをClustanとFactorというコンピュータープログラムにインプットして分析した。そして、各土器フェイズの社会が、年令や性別、身分差などどのような相違性によって区分けされていたのか、という点を確認した上で、アテネでは前九世紀に「貴族政」社会が成立するが、前八世紀の間にそれが崩壊し、前八世紀末にポリスが出現したという結論を得ている。モーガンとウィットローは、土器の様式から、前八世紀末にアルゴスが平野全域を支配するまでの、平野内の主要な集落の相互関係を解明する過程で、比較された二つの集合体間の相違性を数値によって示すという Euclidean Distance Coefficient というプログラムを用いている。

しかし、近年の暗黒時代の研究動向が、従来の古典考古学の方法を否定する方向にのみ、傾いているわけではない。例えば個々の土器の文様や器形を比較検討し分類するような、伝統的手法にのっとった研究の重要性は、今現在もその価値に変わりがない。すなわち、考古学的資料を数値化し、それを先端的理論を駆使して処理する研究を支えているのも、遺物や遺構の年代や性格を解明していく地道な基礎研究なのである。例えば、新しい手法を用いる研究者は、J・N・コールドストリームの研究を盛んに批判してきた。しかし、そうしたコールドストリーム批判を展開している当の研究者が、結局のところ、コールドストリームの編年を使用し、その研究の必要性を認めているという事実は、まさにこのような研究の重要性を示す格好の例証であろう。[15] 暗黒時代の土器に対しては、V・R・デスボローの“*Protogeometric Pottery*”と、コールドストリームの“*Greek Geometric Pottery*”によって、相対編年の大枠が整えられたとしてよい。[16] 当然のことながら、資料の増加や研究の進展にともない、修正や批判が加えられてきたが、現在でも暗黒時代に関心を持つ者が、まず繙かなくてはならない基礎的、かつ、最も重要な研究文献の一つなのである。

このように、現在の暗黒時代の研究には、大きく分けて二つの相互補完的な研究の流れがあると言える。本稿の課題であるエレウシスとアッティカの関係についても、双方の研究傾向の成果を摂取し、整合的に復元していく必要があるであろう。

さて、本節で扱うクールーの「アルゴスのモノクローム土器」に関する研究は、土器を一つ一つ検討し、タイプ別に分類する作業を基礎としている点から言って、伝統的古典考古学の手法を採用している。しかし、詳細に研究されることのなかった半粗製の特殊な土器群であり、また、従来研究が手薄であった前七世紀[17]を主要年代とする土器群で

ある「アルゴスのモノクローム土器」の性格や分布状況を解明したことは、伝統的考古学が、資料の少ない暗黒時代から前古典期への移行期、つまり一般的にポリス成立期と言われている時代の社会を再構成する際に、なお新たな知見をもたらしうるという可能性を強く示唆する。さらに、この土器群が特にエレウシスから集中して出土している点を考えあわせれば、クールーの研究成果は、ポリス成立期のエレウシスを考察するという本稿の課題に対しても、何らかの有益な知見をもたらしてくれるものと期待される。

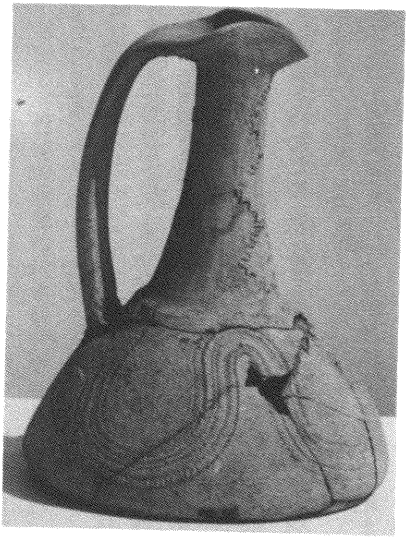
(2)

「アルゴスのモノクローム土器」は、暗黒時代末から前古典期にかけての、ギリシア世界各地の墓や聖域から出土する、精製されていない小型の土器である。この土器群が「〝アルゴスの〟モノクローム土器」と称されている理由は、例えばアルゴスのヘライオンなど、アルゴリス地方から多く報告されたために、そこが生産地と考えられてきたからである。[18]

この土器群は主に前八世紀後半から前六世紀まで多く生産されたが、前七世紀前半にその生産の頂点を迎える。[19]ろくろで製作されている場合もあるが、多くはろくろを使用せずに整形されており、また、この土器に文様が描かれている例はない。ろくろを使用していない点、文様が描かれていない点から言って、この土器は精製土器には分類されず、粗製土器に分類される。通常粗製土器と言えば、日常生活に使用された土器を指すが、しかし、「アルゴスのモノクローム土器」は、日常生活に使用された土器とは次の点で明らかに異なる。第一に、「アルゴスのモノクローム土器」が出土する遺構は、住居ではなく墓や聖域である。第二に、一般的な粗製土器が粗雑に整形されているのに対して、「アルゴスのモノクローム土器」は、ろくろが使用されていない場合でも、丁寧に整形されている。第三に、日常生活用の土器は施文されることがないのに対して、この土器群には、文様が描かれることはないが、刻印によって精緻な文様が施されている例がある。第四に、「アルゴスのモノクローム土器」には、例えばざくろを模した形など、全く実用に適さない器形がある。[20]これらの点から言って、この土器を、日常生活に使用された粗製土器と同様に考えることはできず、何か特別な用途を持つものであったと推測される。[21]

写真は、エレウシスの博物館所蔵の、レキュトス型の「アルゴスのモノクローム土器」である。エレウシスの墓から出土した土器で、高さは一三・五㎝、胴部と頸部に刻印による文様が施されている。このレキュトス型の他に、

胴部が球形のアリバロス型も、この土器群に多い器形である。[22]



エレウシス出土
「アルゴスのモノクローム土器」
(Eleusis Museum №665, Courtesy of Museum, cf.N.Kourou, *BCH* 111, 1987, p.42, №37.)

さて、クールーはまず、この土器群がアルゴス以外、特にアッティカやコリントからも多く出土しているという事実を指摘した後、「アルゴスのモノクローム土器」には、アルゴリス製のオリジナル以外にそれを真似たグループが存在すると考えた。そして、アルゴリス製を模倣したグループを、二つに分類した。その第一群は、コリント土器の特徴である白色系の粘土を使用したコリント製のものであり、第二群は赤色系（Munsell Soil Color Charts, Baltimore, 1975, 5YR 6/6）の粘土を使用して製作され、さらに、表面に黄色系（Munsell Soil Color Charts, 10YR 8/4）の粘土を上塗りされているものである。この後者の黄色系の粘土は、赤色系の粘土を完全に覆い隠すように塗られており、土器の表面に光沢を与えている。第二群の器形は、胴部が円錐形のレキュトス型と、胴部が球形のアリバロス型が一般的であるが、特殊な例として複数のアリバロスが環状につながったケルノスのようなタイプもある。そして、多くは全く模様が施されていないが、波線状に細かい刻みが入れられていることがある。また、この第二群は、他の「アルゴスのモノクローム土器」の焼成温度が850度以下であるのに対して、1050度前後という高い温度で焼成されている。つまり、これらは他の工房よりも高い技術を有する工房により製作されたのである。さらに、これらはエレウシスに分布が集中している。[23]

それでは、この第二群の「アルゴスのモノクローム土器」の生産地はどこであろうか。一般的に「アルゴスのモノクローム土器」は、アルゴリス、コリント、アッティカから多く出土するために、生産地の候補としてもこの三箇所が挙げられる。これらの候補地に対して、クールーは以下の

ような結論を出している。

アルゴリス製の可能性に対しては、アルゴリスの粘土は緑色系の色合であり、さらに、このグループの粘土はアルゴリス製の粘土よりも雲母の含有量が多いという理由で退けている。また、コリント製の可能性に対しても、この第二群の「アルゴスのモノクローム土器」が、肉眼でも見えるほどに雲母を多量に含んでいるのに対して、コリントの粘土は顕微鏡を用いても微量にしか雲母が確認されないことから、これを退けている。そして、この第二群に使用されている粘土が、色彩や雲母の含有量から判断して、アッティカから採掘される粘土の一種であると推論する。[24]

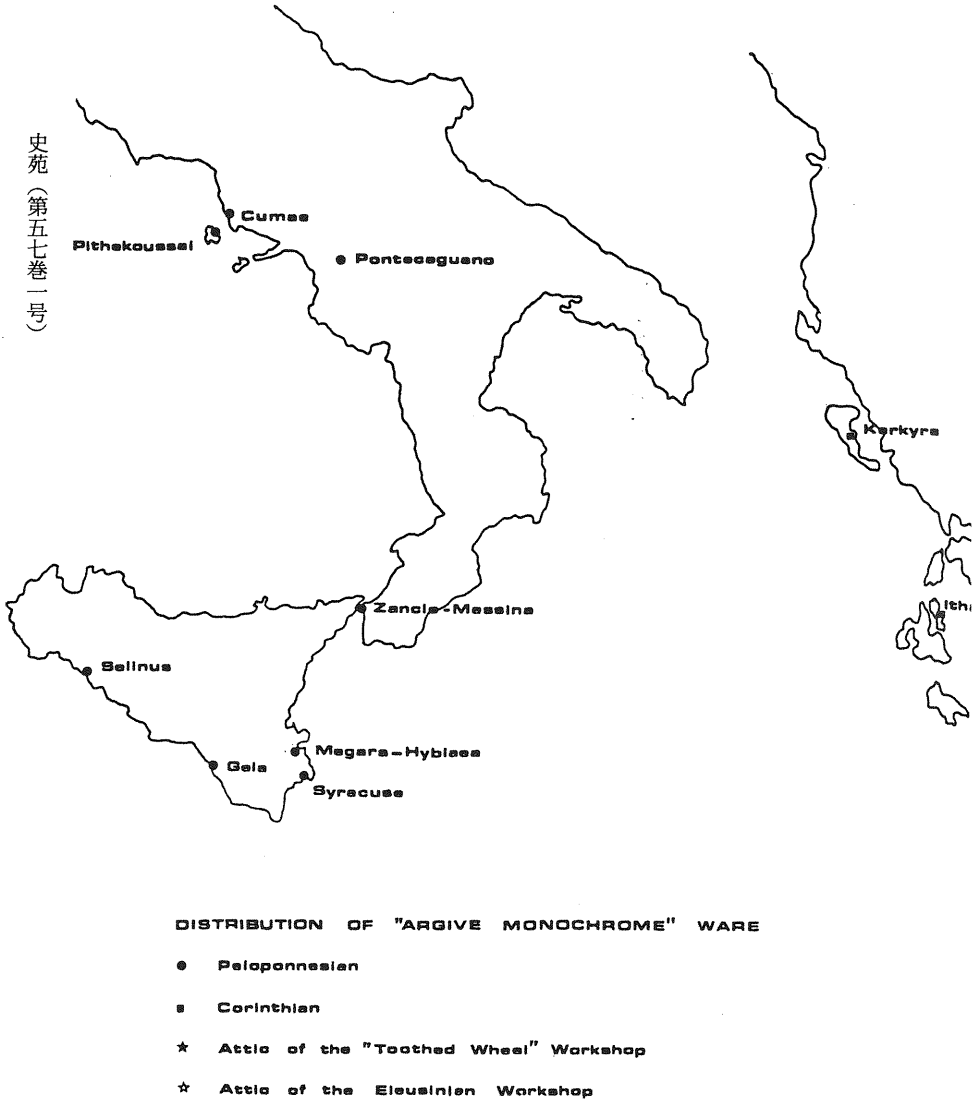
そのうえ、クールーは研究を進め、「アルゴスのモノクローム土器」の生産地や工房を、粘土の色、文様、器形などから、七つに分類して、検討した結果、以下の点を明らかにすることに成功した。すなわち、①「アルゴスのモノクローム土器」はアルゴリスやコリントなどペロポネソス半島だけではなく、ギリシア各地で生産されていた、②アッティカは他地域に比して大量にこの土器を生産していた、③アッティカには幾つかこの土器の工房が存在したが、特に大規模に生産していた工房が二つあった、という点である。そして、エレウシスからは、アッティカの大きな工房の「アルゴスのモノクローム土器」が、二種類とも出土している。[25]

さらにその後、クールーは、この土器群の分布と交易について検討を加えた。[26]

クールーは分布図（分布図参照）により、ペロポネソス製の「アルゴスのモノクローム土器」がギリシア世界に広く分布していたことを示し、交易品として輸出されたと結論する（分布図には記されていないが、他に「アルゴスのモノクローム土器」が出土している遺跡に、エヴィア島レフカンディとクレタ島エレフセルナがある）。[27] さらに、クールーはこの論文の中で、ペロポネソス製のこの土器群はアッティカからも出土しているが、シシリー島から多量に出土し、また、ピテクーサイからも報告があることから、[28] 西方が主要なマーケットであったと推測している。これまで一般的に、交易の対象となる土器は文様が描かれた精製土器であったとされてきたが、ここで新たに提起された「アルゴスのモノクローム土器」のような粗製土器が輸出されたという意見は、独創的である。

またクールーは、外見が美しい精製土器はそれ自体交易品としての価値があるが、「アルゴスのモノクローム土器」には、その可能性を想定しえないことから、何か貴重なものが入れられていたと推察する。そして、この土器群が墓やヘラやデメテルの聖域から多く出土することに鑑みて、

Eretria
Thebes
Ritsona
Athens
Perachora
Eleusis
Spata
Corinth
Phalirio
Merenta
Anavyssos
Zagora
Argos
Aphaia
Samos
Delos
Paros
Naxos
Siphnos
Thera
Lindos
Ag. Georgios



「アルゴスのモノクローム土器」分布図
Courtesy of N. Kourou (Handmade Pottery and Trade : the Case of the "Argive Monochrome" Ware, *Proceedings of the 3rd Symposium on Ancient Greek and Related Pottery, Aug. 31-Sep. 4, 1987, Copenhagen*, eds. J. Christiansen and T. Melander, Copenhagen, 1988, pp. 316f, Fig. 1.)
（分布図中の「エレウシスの工房（Eleusinian Workshop）」は、この工房の土器がエレウシスから多量に出土しているためにこの名称が与えられているのであって、この工房がエレウシスにあったことを意味しているわけではない。）

死、再生、農耕神、クトーンの神々と関係があると考え、この土器の中身がある種の薬品、多分、鎮静剤として用いられた阿片であったことを仮説として提示した。「アルゴスのモノクローム土器」に阿片が入れられて聖域に奉納されたり、中身の阿片がけが人のために鎮静剤として使用された後、この土器が墓に副葬されたのではないかと考えたのである。[29]

ところで、このようにペロポネソス製の「アルゴスのモノクローム土器」が、ギリシア世界全域から出土しているのに対して、アッティカ製のこの土器群は出土範囲が限られている。アッティカをとり巻く周辺地域やキクラデス諸島、ロードス島からも出土はしているが、数は少なく、交易品として他地域に大量に輸出された形跡はない。それゆえ、クールーはペロポネソス製「アルゴスのモノクローム土器」が元来交易品として生産され、輸出されたのに対して、アッティカ製はより偶然の経緯により他地域にもたらされた、そして、アッティカ製のこの土器グループは、アッティカ内では広く分布している点から考えて、基本的にアッティカ領域内の需要を満たすために生産された、と結論した。[30]

上記がクールーの研究内容であるが、本稿のテーマに関わる点を以下にまとめておく。

①「アルゴスのモノクローム土器」は、墓や聖域から出土する点、粗製土器ではあるが丁寧に製作されている点、実用に適さない器形がある点から考えて、粗製土器ではあるが特別の用途を持つ土器群である。クールーは、この土器の中身は阿片であり、そのために聖域に奉納されたり、また、中身の阿片がけが人に鎮静剤として使用された後に、この土器が墓に副葬されたという仮説を立てた。

②「アルゴスのモノクローム土器」は前八世紀から本格的に生産されるようになり、前七世紀前半に最盛期を迎える。

③アッティカには「アルゴスのモノクローム土器」の工房が幾つか存在し、その内の二ヶ所の工房においては特に大規模な生産が行なわれた。また、アッティカ製の「アルゴスのモノクローム土器」は、基本的にアッティカ領域内で使用されるために生産された。さらに、アッティカ製「アルゴスのモノクローム土器」が、エレウシスから集中して出土している。

このようなクールーの研究成果をふまえて、次に、ポリス成立期のエレウシスとアッティカとの関係について検討してみよう。

(3)

以下、エレウシスとアッティカとの関係を探るという本稿の視点から、クールーの研究成果の意味を探ってみよう。

さて、まず第一に、「アルゴスのモノクローム土器」の中身、用途についてである。上述のごとく、クールーはこの土器群が墓やヘラやデメテルの聖域から多く出土することから推察して、この土器の中身は阿片であったと想定した。

古代地中海世界における阿片の使用や交易は、クールーの論文以前に既に指摘されている。[31] 阿片はケシから抽出されるが、エレウシスの遺構や遺物にケシの図柄が彫刻されている例もある。[32] デメテルを主神とするテスモフォリア祭に関する前四世紀の碑文（*IG* II² 1184）の中には、役員達が供与する物の中に、ケシで作られた食べ物（[μ] ὴ κωνος χοὶ νικα）が言及されている。また、ヘラの聖域から、ケシを模した遺物が出土することもある。[33]「アルゴスのモノクローム土器」の中身が阿片であり、そのために墓に副葬されたり聖域に奉納されたというクールーの仮説は確かに魅力的な仮説ではある。しかし、本稿に於いては、そこまでこの土器グループの用途を限定して考えずに、墓や聖域から出土する点を考慮して、何らかの信仰または宗教に関わる土器群と解釈しておけば十分であろう。

第二に、この土器群が生産された時期についてである。「アルゴスのモノクローム土器」は前八世紀から生産が本格化し、前七世紀前半に最盛期を迎えるが、これは、ギリシアで一般的にポリスが成立していく時期に一致する。そして、このポリス成立期は、例えばオリンピアやデルフィのような汎ギリシア的聖域が発展し始めるのみならず、ギリシア世界各地に神殿や聖域が建立され、宗教的側面において、社会に変化が起こったと言われる時期である。信仰や宗教に関わる用途があったと推測される「アルゴスのモノクローム土器」が、この時期に最も多く生産された事実は、ポリス成立期の社会における宗教的諸要素の一変化と見なしてよいであろう。

第三に、アッティカにおけるこの土器群の生産状況についてである。クールーによれば、アッティカには「アルゴスのモノクローム土器」を大規模に生産していた工房が二つ存在した。そして、そのアッティカ製「アルゴスのモノクローム土器」は、他地域から大量に出土することはない点から考えて、輸出されるために生産されたのではなく、基本的に自己の領域（アッティカ）内の需要を満たすために生産されたと考えられる。これを言い換えるならば、アッティカ製「アルゴスのモノクローム土器」が相当数出土し

ている範囲はアッティカの領域内であった可能性が強い。このような点を踏まえてエレウシスとアッティカとの関係を考えるならば、アッティカ製「アルゴスのモノクローム土器」が集中して出土しているエレウシスは、アッティカに帰属していたと見なすのが適当であると思われる。すなわち、この土器群の分布状況からして、この土器群が作られた時代に、エレウシスを含むアッティカ地方には、この土器群を用いるような、何らかの共通の信仰や宗教が存在していたという可能性が強く示唆されるのである。

ところで、この土器群が多く生産されるようになる前八世紀は、前節で記したように、エレウシスの聖域が発展の兆候を示し始める時期でもある。この聖域発展の初期段階、つまり、暗黒時代末から前古典期初期におけるエレウシスの聖域に関して、それが地方集落固有の聖域であったのか、ポリス・アテネの聖域であったのか、という第二の問題があることは、先に述べた。この問題に対しては、上の考察から推して、エレウシスの聖域は暗黒時代末、つまり、聖域発展の初期から、ポリス・アテネの聖域であったと答えることができるであろう。さらに、エレウシスの聖域が、ポリスの管理のもとに前八世紀に発展の兆候を示し始めたことは、エレウシスのアッティカに対する政治的併合がこの時期であった可能性をも示唆しうることを指摘しておきたい。

四　エレウシスにおける祖先崇拝

前節では、「アルゴスのモノクローム土器」を資料として得られた結論として、エレウシスの聖域はこの土器群の生産が本格化する前八世紀以降、ポリス・アテネの聖域であったことを推測した。以下では最後に、暗黒時代のエレウシスにおいて行なわれていた祖先崇拝について、先行研究を踏まえながら検討することで、エレウシスがアテネの影響に入ったのは前八世紀であり、恐らくそれよりはさかのぼらないであろうということを、示してみたい。

さて、暗黒時代以降のギリシア各地においては、ミケーネ時代の墓に対する祭祀が確認され、これは、英雄崇拝や墓崇拝（Tomb cult）、祖先崇拝と称されている。例えば、アッティカでは、メニディやトリコス、アリキ・グリファダのミケーネ時代の墓から、暗黒時代末期や前古典期にかけての土器が出土しており、ミケーネ時代の墓の被葬者が祖先または英雄として崇拝され、その祭祀が行なわれたと推測されている。[34]

本稿の対象であるエレウシスからは、青銅器時代の墓域において、前八世紀に周壁が造られたという資料が報告さ

れている。[35] この遺構に対しては、前八世紀のエレウシスの集落の人々が青銅器時代の墓を崇拝の対象にしていたと解釈する研究者と、前八世紀の人々がそれらの青銅器時代の墓を開けて副葬品を取り出したと想定されることから、崇拝していたのではなく、略奪したのだと解釈する研究者がいる。[36]

確かにこの遺構からは、メニディやトリコスとは異なって、奉納品など、祭祀が行なわれたことを示す決定的な証拠は出土していない。しかしこの他に、エレウシスからは、青銅器時代の土器が副葬品に含まれていた後期幾何学文様期（Late Geometric －前八世紀後半－）の墓や、[37] 上述の周壁のすぐそばから、ミケーネ時代の岩室墓が後期幾何学文様期に再利用された例も報告されており、[38] こうした点ではミケーネ時代の墓に祖先崇拝が行なわれていたメニディやトリコス、アリキ・グリファダと共通性を持つと言えるであろう。

このような点を考えあわせるならば、前八世紀後半のエレウシスの人々は、自分達の集落が古い歴史を持っていることを認識し、青銅器時代の墓の被葬者を自分達の祖先と見なしていたと推測される。

それでは、この祖先崇拝は、エレウシスの集落にとってどのような意義を持っていたのであろうか。

暗黒時代後期から前古典期におけるミケーネ時代の墓に対する祭祀は、英雄叙事詩との関係や社会層の特定など、様々な角度から研究されてきた。

英雄崇拝に関する考古学的資料を初めて包括的に論じたJ・N・コールドストリームは、資料をまとめた結果、前八世紀以降この祭祀が行なわれるようになったと考えた。[39] そして、その年代がホメロスの叙事詩が普及する時期に一致することから、英雄祭祀が行なわれるようになった要因を、ギリシア世界における叙事詩の普及に求めた。しかし、現在では、青銅器時代の墓に対する信仰は前一〇世紀から行なわれていたことが知られている。[40]

その後、祖先・英雄崇拝に関しては、スノドグラス、モリス、ウィットリーらによって、暗黒時代の社会構造やポリスの成立などを考察の背景としてそれを解釈する見解が提出された。

A・スノドグラスは、英雄崇拝に関して、前八世紀に人口が増加したという自説を前提として、暗黒時代末に新しい土地に入植した自由農民が、土地の所有権を主張するために、ミケーネ時代の墓に祭祀を行なったと結論した。[41] しかし、J・ウイットリーが批判しているように、エレウシスやトリコスのように、前八世紀になって居住が開始された新興集落ではなく、暗黒時代初期から居住された集落に

おいても、ミケーネ時代の墓における祖先崇拝が確認される点から考えて、スノドグラスの意見を肯定することは不可能である。[42]

このスノドグラスの意見に反して、I・モリスは英雄崇拝を行なった人々は貴族層であると推察した。すなわち、モリスによれば、英雄崇拝に関する資料が前八世紀に急増した背景として、ポリスの成立に際して、古い貴族政社会が危機に瀕していたことが考えられるという。前八世紀に英雄崇拝が最盛期を迎えることをグラフで示し、その理由を、ポリス成立にともなう社会構造の変化の中に求めようとしている。[43]そうした試みは、この論文以前に、アテネの墓域を資料として、暗黒時代の社会を上層階級と下層階級との軋轢から論究したモリスの自説を背景としているものと思われる。[44]しかし、モリスは英雄崇拝に関して一通り議論を展開した後で、墓そのものからの資料は乏しく、また、祭祀が行なわれた各地域において、英雄崇拝は様々な意義を有していたと述べており、自己の結論に確信を持っているのかどうか疑問を抱かせる。

このスノドグラスとモリスの二人がギリシア世界全体を考察対象としたのに対して、J・ウイットリーはアッティカとアルゴリスに焦点を絞って資料を検討した。本稿の対象であるエレウシスについては、彼は先に記した周壁で囲まれた青銅器時代の墓を、英雄崇拝の一つとして解釈している。そして、エレウシスを含めた英雄崇拝の資料が確認されるアッティカの集落が、前八世紀になって居住が開始される新興集落ではなく、暗黒時代初期から居住されている古い伝統のある集落である点に着目する。ウイットリーは、このような古くから居住された集落は、ポリスが形成されていく際に、アテネ中心地域の支配がアッティカ全域に及ぶことに抵抗したと考え、英雄崇拝は、ポリス・アテネが形成されるに対して、地方の集落が結束を固め、土着的自立性、固有意識（local autochthony）を強めるために行なわれたと推測している。[45]

アッティカの英雄崇拝は、地方集落により、アテネ中心地域の勢力伸長に対抗するために行なわれたというウイットリーの結論そのものは、アテネ中心地域からも英雄崇拝、墓崇拝の資料が出土している事実により否定されるであろう。[46]しかし、アテネ中心地域も含めてエレウシス、トリコスなど、アッティカにおける青銅器時代の墓に対する信仰が確認される集落は、確かに、ウイットリーの指摘どおり、暗黒時代初期から居住された有力集落なのである。[47]そして、とりわけそのような古い伝統を持つ集落において、祖先崇拝が確認されるということは、ウィットリーの言うように、これらの古い集落において、暗黒時代に土着的自立性や固

有意識（local autochthony）が形成されたことを物語ると考えうるであろう。

それでは、特に前八世紀にエレウシスにおいて祖先崇拝が行なわれた意味はどのように解釈されるであろうか。

エレウシスを含む暗黒時代のアッティカの墓域を、埋葬様式の多様性－土葬と火葬、墓の形、方位、副葬品など－から分析したI・モリスは次のような見解を提出している。[48]

すなわち、モリスによれば、後期幾何学文様期（Late Geometric）になって埋葬様式が多様化するまで、アテネ中心地域においては、原幾何学文様期（Protogeometric）から中期幾何学文様期（Middle Geometric）までは、埋葬様式の多様性を示す数値は低い（つまり、比較的均一であった）、しかし、エレウシスは、「南の墓域」において中期幾何学文様期に大きな多様性が確認されることなどから、多分アテネ中心地域のモデルには該当しないという。このモリスの分析結果からすれば、後期幾何学文様期（前八世紀後半）まで、エレウシスはアテネ中心地域の文化的影響外にあったと想定される。

さらに、ここで強調されるべきは、エレウシスの集落が、本来的に独立したポリスを形成しうる特徴－つまり、地形的に独立した平野に、固有のアクロポリスを中心として、暗黒時代初期から集落が発展したという特徴－を備えている点である。

上記の点を考え併せれば、特に前八世紀に、エレウシスの集落に、土着的自立性を強める役割を果たしたであろう祖先崇拝が行なわれた事実について、次のように推論することが可能である。すなわち、エレウシスは暗黒時代初期には独立していたが、前八世紀にアッティカに併合されたために、自己の集落の土着的自立意識を保持するために祖先崇拝を行なったのであろう、と。

五　おわりに

本稿においては、「アルゴスのモノクローム土器」と祖先崇拝を資料として、ポリス成立期のエレウシスの集落について検討してきた。

やはりポリス成立期のエレウシスに焦点を当てた桜井氏は、主に埋葬様式を検討した結果、暗黒時代初期からエレウシスはアッティカの一部であり、遅くとも前九世紀までにはエレウシスはアテネに併合されていたと結論された。[49]

しかし、本稿で検討の対象とした資料は、暗黒時代末（前八世紀）のエレウシスの集落に変化が起こったことを示している。

前八世紀に生産が本格化される「アルゴスのモノクロー

ム土器」の分布状況からは、ポリス成立期のエレウシスの集落は、アッティカの一部としてポリス・アテネに組織されていたという結論が導き出された。そして、この結論から、この土器群の生産開始の時期とほぼ同じ頃に発展の兆候を示し始めたエレウシスの聖域は、既に暗黒時代末期からポリス・アテネの聖域であったと推測した。さらに、この聖域が、ポリスの管理のもとに前八世紀に発展し始めることは、エレウシスのアッティカへの併合がこの時期であった可能性をも示唆しうる。

また、暗黒時代エレウシスにおける宗教や信仰に関する他の資料、すなわち祖先崇拝からは、エレウシスのアッティカへの併合が前八世紀であるという上の推論を補強する次の見解が得られた。すなわち、エレウシスにおける土着的自立性を高める機能を果たしたであろう祖先崇拝は、前八世紀に特に確認されるが、それは、この時期に集落が自立性を失ったがために、祖先崇拝を行なうことによって、自分達の集落における自立意識を保持しようとしたことを示していると言えよう。

上記すべての点から、暗黒時代のエレウシスとアッティカとの関係について、次の見解を本稿の結論として提示しておきたい。

エレウシスの集落は暗黒時代初期には独立しており、それがアッティカに併合されたのは、暗黒時代末（前八世紀）、つまり、ポリス成立期においてであろう、という見解である。

なお、ポリス成立期のエレウシスとアッティカに関する問題は、アッティカの統一とポリスの成立というより大きなテーマの一構成要素である。今後、暗黒時代のアッティカの他の集落についても検討を加え、ポリス・アテネの成立過程を具体的に解明することを、筆者自身の課題としていきたい。

* I am very grateful to Prof.N.Kourou (University of Athens) for permitting me kindly to use her original drawing of the map 'the distribution of the "Argive Monochrome" Ware' (N.Kourou, Handmade Pottery and Trade : the Case of the "Argive Monochrome" Ware, *Proceedings of the 3rd Symposium on Ancient Greek and Related Pottery, August 31 September 4, 1987, Copenhagen*, eds. J.Christiansen and T. Melander, Copenhagen, 1988, pp.316f, Fig.1). The photograph (Eleusis Museum No.665) was taken by the author with permission.

註

(1) cf.J.Travlos, Eleusis, *Bildlexikon zur Topographie des Antiken Attika*,Tübingen, 1988, p.93.

(2) 桜井万里子、「エレウシスの祭儀とアテナイ民主政の進展」『史学雑誌』第八二編第一〇号、一九七三（以下、桜井（一九七三）と略記）、一一四一頁。

(3) ポリス成立期におけるエレウシスを概観したものに、J.Travlos, Η Αθήνα και η Ελευσίνα στον 8° και 7° π.Χ. αιώνα, *ASAtene* 61 (N.S. 45), pp.323-338.

(4) 馬場恵二訳、パウサニアス著『ギリシア案内記（上）』、岩波書店、一九九一、一七四頁。

(5) 桜井万里子、「アテナイのエレウシス併合について」『東京学芸大学紀要』三一三〇、一九七九（以下、桜井（一九七九）と略記）、二〇一一二〇九頁。

(6) しかし、桜井氏はエレウシスの発掘報告自体を分析対象とはされていない。参考にされている文献は、二次文献である。桜井氏に反して、R・オズボーンは、暗黒時代後期において、エレウシスとアテネには埋葬様式に違いがあると述べている。ただし、その相違は中心と地方の間のある程度の時間のずれであると説明する（R.Osborne, Archaeology, the Salaminioi, and the Politics of Sacred Space in Archaic Attica, eds. S.E.Alcock and R.Osborne, *Placing the Gods: Sanctuaries and Sacred Space in Ancient Greece*, Clarendon Press,Oxford,1994, p.152)。

(7) F.de Polignac, *La Naissance de la Cité Grecque*, Paris, 1984, pp.87ff, (English Edition, *Cults, Territory and the Origins of the Greek City-State*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1995, pp.83ff). このドゥ・ポリニャックのアッティカに関する意見を批判したものに、R.Osborne, *op.cit.*, p.153., （桜井万里子、『古代ギリシア社会史研究―宗教・女性・他者―』、岩波書店、一九九六、九八頁を参照）。

(8) R.A.Padgug, Eleusis and the Union of Attika, *GRBS* 13, 1972, pp.136-138., 桜井（一九七九）、二〇一頁., K.Clinton, *Myth and Cult-the Iconography of the Eleusinian Mysteries*, Stockholm, 1992, pp.28-32., H.P.Foley (ed.), *The Homeric Hymn to Demeter: Translation, Commentary and Interpretative Essays*, Princeton U.P., Princeton, New Jersey, 1994, pp.169-175.

(9) 暗黒時代初期から遺物が出土しているエレウシスの墓域の発掘（A.Σκιάς, Παναρχαία Ελευσινιακή Νεκρόπολις, *AE* 1898, pp.30-122., Νεώτεραι Ανασκαφαί εν τη Παναρχαία Ελευσινιακή Νεκροπόλει, *AE* 1912, pp.1-39.）は、土器の編年が現在のようには確立していない（つまり、原幾何学文様期という編年区分は使用されていない）時代の調査であるため、その発掘報告を資料として使用する際には、遺構や遺物の年代に関して、注意が必要である。ただし、エレウシスの博物館にエレウシス出土の原幾何学文様期の土器が展示されている点から言っ

ても、エレウシスが原幾何学文様期から居住されていたことは確実である。

(10) C.M.Antonaccio, *An Archaeology of Ancesters. Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Rowman and Littlefield Publishers, London, 1995、（以下、Antonaccio (1995) と略記), pp.190f.

K.Fagerström, *Greek Iron Age Architecture*, Göteborg, 1988, p.44 は、この建物に関して、後期幾何学文様期においては農耕用であったものが、後に聖域になったと推論している。この意見に対する反論は、Antonaccio (1995), p.191.

(11) cf.G.E.Mylonas, *Eleusis and the Eleusinian Mysteries*, Princeton U.P., Princeton, New Jersey, 1961, p.7., 桜井（一九七三), 三一五頁。

(12) C.Renfrew, The Great Tradition versus the Great Divide : Archaeology as Anthropology, *AJA* 84, 1980, pp.287-298., S.L.Dyson, A Classical Archaeologist's Response to the "New Archaeology", *BASOR* 242, 1981, pp.7-13., J.Wiseman, Conflicts in Archaeology: Education and Practice, *JFA* 10, 1983, pp.1-9., A.M.Snodgrass, The New Archaeology and the Classical Archaeologist, *AJA* 89, 1985, pp.31-37., cf.S.L. Dyson, From New to New Age Archaeology : Archaeological Theory and Classical Archaeology. A 1990s Perspective, *AJA* 97, 1993, pp.195-206., I.Morris, Archaeology of Greece, *Classical Greece : Ancient Histories and Modern Archaeologies*, ed. I. Morris, Cambridge U.P., 1994, pp.8-47.

(13) I.Morris, *Burial and Ancient Society*, Cambridge U.P., 1987（以下、Morris (1987) と略記).

(14) J.Whitley, *Style and Society in Dark Age Greece*, Cambridge U.P., 1991., C.Morgan and T.Whitelaw, Pots and Politics :Ceramic Evidence for the Rise of the Argive State, *AJA* 95, 1991, pp.79-108.

(15) P.Courbin, J.N.Coldstream:English Archaeologist, *KLADOS. Essays in Honour of J.N.Coldstream*, ed.C.Morris, *BICS Suppl.* 63, 1995, p.7.

また、土器の文様を比較検討するような、ドイツの美術史や考古学の伝統を擁護する意見に、J.Whitley, Art History, Archaeology and Idealism : the German Tradition, *Archaeology as Long-Term History*, ed.I.Hodder, Cambridge U.P., 1987, pp.9-15.

(16) V.R.Desborough, *Protogeometric Pottery*, Clarendon Press, Oxford, 1952., J.N.Coldstream, *Greek Geometric Pottery : A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, Methuen, 1968.

(17) cf.R.Osborne, A Crisis in Archaeological History? The Seventh Century B.C. in Attica, *BSA* 84, 1989, pp.297ff.

(18) J.L.Caskey and P.Amandry, Investigations at the Heraion of Argos 1949, *Hesperia* 21, 1952, pp.202-207.

(19) ただし、コリントス地方では、そのプロトタイプが、暗黒時

代でも早い時期から製作されていたという（C.K. Williams II, A Survey of Pottery from Corinth from 730 to 600 B.C., *ASAtene* 59 (N.S. 43), 1981, p.146, n.14.）。アッティカ製に関しては、クールーによれば、前八世紀が上限である（後掲註（23）論文、五九頁）。

（20）cf. N.Kourou, *Ροα Γλυκειά (Γύρω απ' τα πήλινα ομοιώματα ροδιού του 8ου και του 7ου π.Χ. αι.), ΕΙΛΑΠΙΝΗ. Τόμος Τιμητικός για τον Καθηγητή Ν.Πλάτωνα*, Irakleion, Crete, 1987, pp.107f.

（21）cf. N.Kourou, Handmade Pottery and Trade : the Case of the "Argive Monochrome" Ware, *Proceedings of the 3rd Symposium on Ancient Greek and Related Pottery, August 31 - September 4, 1987, Copenhagen*, eds. J.Christiansen and T. Melander, Copenhagen, 1988（以下、Kourou (1988) と略記）, p.314f, 320.

（22）cf.P.Courbin, *La Céramique Géométrique de l'Argolide*, Paris, 1966, pp.29-34., J.N.Coldstream, *Geometric Greece*, Methuen, 1977（以下、Coldstream (1977) と略記）, p.145.

（23）N.Kourou, *Αργίτες, Κορίνθιοι η Ελευσίνιοι (;) Γύρω από ενα Κεραμεικό Εργαστήριο του Τύπου των Αργίτικων Μονόχρωμων, Acts of the Third International Congress of Peloponnesian Studies, Kalamata, 8-15 September, 1985*, Vol.2, Athens, 1987-1988（以下、Kourou (1987-1988) と略記）, pp.56-60,62.

クールーはこの論文の中で、エレウシスの博物館における第一回目の調査の時に、未発表の資料が二七個確認されたことを記している（p.60, n.29）。「アルゴスのモノクローム土器」に関する一連の論文の中で、クールーは主に発表された資料のみを扱っているが、この記述から推察する限り、研究そのものは未発表の資料まで考察対象に入れた包括的なものであると思われる。

（24）Kourou (1987-1988), pp.61f.

（25）N.Kourou, A Propos de Quelques Ateliers de Céramique Fine, non Tournée du Type "Argien Monochrome", *BCH* 111, 1987, pp.31-53.

その他に、この論文で重要な点は、クールーがアッティカにあったと推測した二つの大きな工房の土器に対して、地質学者が粘土の成分分析を行い、アッティカの土であることが科学的に証明された点である（pp.52f）。

（26）Kourou (1988), pp.314-324.

（27）M.Popham et al.(eds.), *Lefkandi I. The Iron Age, the Settlement, the Cemeteries*, Thames and Hudson, 1980, p.72., N.Stampolidis, Homer and the Cremation Burials of Eleutherna, *Homeric Quetions*, ed.J.P.Crielaard, J.G.Gieben, Amsterdam, 1995, p.298. クレタ島エレフセルナについては、拙稿「クレタ島エレフセルナ―新しいギリシア暗黒時代像の構築にむけて―」

『史潮』新三九号、一九九六（発行予定）を参照。

(28) cf.D.Ridgway, *The First Western Greeks*, Cambridge U.P., 1992, pp.62, 71-77.

(29) Kourou (1988), pp.321f.

(30) Kourou (1988), p.318.

(31) R.S.Merrillees, Opium Trade in the Bronze Age Levant, *Antiquity* 36, 1962, pp.287-292., P.Kritikos-S.Papadaki, Μή κωνος και Οπίου Ιστορία και Εξάπλωσις εν τη Περιοχή της Ανατολικής Μεσογείου κατά την Αρχαιότητα, *AE* 1963, pp.80-150., V.Karageorghis, A Twelfth-Century BC Opium Pipe from Kition, *Antiquity* 50, 1976, pp.125-129., R.S.Merrillees, Opium again in Antiquity, *Levant* 11, 1979, pp.167-171., H.Tzavella-Evjen, Homeric Medicine, *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.:Tradition and Innovation*, ed.R.Hägg, Stockholm, 1983, p.188.

(32) Mylonas, *op.cit.*, p.159., C.Kerényi, *Eleusis. Archetypal Image of Mother and Daughter*, Routledge and Kegan Paul, New York, London, 1967, p.180.

(33) N.M.Verdelis, A Sanctuary at Solygeia, *Archaeology* 15, 1962, pp.184-192., H.Kyrieleis, The Heraion at Samos, *Greek Sanctuaries. New Approaches-*, eds. N. Marinatos and R.Hägg, pp.138f.

(34) P.Wolters, Vasen aus Menidi II, *JdI* 14, 1899, pp. 103-135., Ι.Παπαδημητρίου, Μυκηναϊκοί Τάφοι Αλυκής Γλυφάδας, *ΠΑΕ* 1955, pp.78-99., M.Devillers, *An Archaic and Classical Votive Deposit from a Mycenaean Tomb at Thorikos*, Gent, 1988., Antonaccio (1995), pp.103-112, 118. さらにメニディについては、R.Hägg, Gifts to the Heroes in Geometric and Archaic Greece, *Gifts to the Gods. Proceedings of the Uppsala Symposium 1985*, eds. T.Linders and G.Nordquist, Uppsala, 1987, pp.94-96.

(35) G.E.Mylonas, *Το Δυτικόν Νεκροταφείον της Ελευσίνος*, Athens, 1975, vol. B, pp.153f, vol. Γ, pl. Λ. 周壁で囲まれたこれらの青銅器時代の墓の年代は、中期青銅器時代から後期青銅器時代の墓と見なす意見（Antonaccio (1995), p.112）もあれば、中期青銅器時代の墓と同じタイプの後期青銅器時代Ⅲ期の墓と見なす意見（J.Whitley, Early States and Hero Cults : A Re-Appraisal, *JHS* 108, 1988（以下、Whitley (1988) と略記）, p.176）もある。

(36) 前者の意見に Whitley (1988), p.176. 後者の意見に Antonaccio (1995), p.115.

(37) J.C.Overbeck, Some Recycled Vases in the West Cemetery at Eleusis, *AJA* 84, pp.89f., Antonaccio (1995), pp.115 ff.

(38) Mylonas, *op.cit.*, vol. B, pp.176f, vol. Γ, pl.165, 394,395.

(39) J.N.Coldstream, Hero-cults in the Age of Homer, *JHS* 96, 1976, pp.8-17., Coldstream (1977), pp.346-348.
(40) C.M.Antonaccio, Contesting the Past : Hero Cult, Tomb Cult, and Epic in Early Greece, AJA 98, 1994, p.402.
(41) A.Snodgrass, *Archaic Greece. The Age of Experiment*, London, 1980, pp.38-40., A.Snodgrass, Les Origines du Culte des Héros dans *la Grèce Antique, La Mort, les Morts dans les Sociétés Anciennes,* eds. G. Gnoli and J.-P. Vernant, Cambridge U.P., 1982, pp.107-119.
(42) Whitley (1988), p.177. さらにウィットリーによれば、スノドグラス自身、現在では、英雄崇拝に関する自己のこの仮説に、以前ほどの確信はないという (Whitley (1988), p.181, n.53.)。
(43) I.Morris, Tomb Cult and the 'Greek Renaissance': the Past in the Present in the 8th Century BC, *Antiquity* 62, 1988, pp.750-761.
(44) Morris (1987).
(45) Whitley (1988), pp.176ff.
(46) Antonaccio (1995), pp.119-126.
(47) さらに、メニディ周辺からも原幾何学文様期の土器が報告されており、暗黒時代初期から居住されていた (*CVA Heidelberg* 3, pl.103)。
(48) Morris (1987), p.128, 195.
(49) 桜井 (一九七九)。

(立教大学大学院史学専攻博士課程後期)